2009 年 8 月 9 日　現地演習

タマンジャヤ村住民グループ訪問と村人へのフィールドワーク内容発表会（８月９日）

タマンジャヤ村にはケンピン・レスタリ（Kemping Lestari; Kelompok Masyarakat Peduli Lingkungan Lestari）という住民グループがある。名前の由来は「持続的環境に配慮する住民グループ」の略だそうだ。彼らは養漁場・養蜂・伝統的な菓子づくりや木彫りなどの知識や技術を、保存し教え合っている。伝統的菓子であるウンピン(emping)づくりと、ココヤシ集積場所、ジャワサイの木彫り師の作業場、養漁場を見学した。これらのような伝統産業は、労働の割に収入が少ないためどんどん消えて行っている（養魚場は伝統産業ではないし、ジャワサイの木彫りは新しい。ウンピン作りはなくなっているとは言えない）。しかし村民達自身が自主的に、これらの技術を教え合ったり、商品が市場へとつながるルートを作ったりしていることで、これらの活動を維持することが出来ている。コミュニティの実情を知る人々が発案すること、実際にその活動を行う・必要としている人々が活動の目的を知っているという事は、持続的活動を行う上で重要な点だと考える。

この住民グループのリーダーであるコマルさんの話によると、国立公園（国家）との意思疎通が上手くいっていない部分もあるという。国立公園の入り口に位置するこの村では、国立公園側といかに上手く連携していくかが最大の課題であろう。また、彼らの共同組合とタマンジャヤ村の村長の間も、連携が上手くいっていないようであった。今回は村長側の人々の話を聞く機会がなかったのが残念であるが、双方が話し合い団結し、村が一丸となって進んで行くことを願う。

この日は村でのホームステイ最終日であったので、夜にはお別れ会が行われた。大勢の村民が集まってくれ、私達のつたないインドネシア語での発表も楽しそうに観覧してくれた。一番楽しかったのは、私達が盆踊りを披露し、その後それぞれのホームステイ先のお父さんお母さん達を巻き込んで皆で一緒に踊ったことだ。お父さん達は、それぞれの娘息子（私達）の真似をして、楽しそうに踊ってくれた。短い滞在ではあったが、タマンジャヤ村の人々の優しさ、温かさを感じた５日間だった。もう会えないかもしれない、またどこかで会えるかもしれない。でも今、一緒に笑いあえてとても楽しい・・・そんな気持ちをそれぞれが抱えながら、最後の夜が幕を閉じた。

（記録：原田ゆかり）